



『源氏流極秘奥儀抄』注釈(四) : 23初音 ~ 30藤袴

著者	岩坪 健
雑誌名	人文學
号	204
ページ	71-98
発行年	2019-11-15
権利	同志社大学人文学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2020.0000000070

巻歌の心に考合すへし。¹⁰

愚按ニ曰、黄花、福寿草、山吹など、すべて黄鳥に准ふ。¹²「とし月をまつにひかれて」といふ歌によれり。又、柳を生るること、習あり。「柳上に鶯飛片々金」といふ詩によれり。又、柳の下に水草をとめとすること、氷とけぬる歌の心也。¹³へ池の鏡ともへ薄氷の伝ともいへり。

二十三 初音（正月元日） 未摘花。梅、松、時節花、福寿草、山吹、柳。

【訳】（光源氏は）明石の君の（娘である明石の）姫君を、紫の上の養女としていらっしやったが、（それを明石の君は）嬉しくお思いになって、一月一日に手紙を（娘に）差し上げなさる。（明石の姫君が）返歌として、「鶯が巢立った跡の音を忘れるだろうか」と詠んだ歌の趣は、ほんとうに大人びて思われ、（明石の君の和歌は）その本歌として、「松の上で鳴く鶯の声を（聞く日を）、初音の日と言うべきであるなあ」ということにより思いついて（詠んだものである）。

長い年月、あなたを待ち続けて年老いた私に、松を引く初子の今日、鶯の初音すなわち初便りを聞かせてほしい。師伝によると、これは、正月元日における歯固めの祝儀に（用いるのが）ふさわしい。花の形は梅を中心にして、松を花留めにする。季節の花を裏側に活ける。巻名歌の趣に合わせて考えるのがよい。

愚案によると、黄色い花、福寿草、山吹などは、すべて黄鳥すなわち鶯になぞらえる。「年月を松に引かれて」という歌によっている。また、柳を活ける習わしがある。「柳上に鶯飛ぶ、片々たる金」という漢詩によっている。また、柳の下に水草を花留めとすることは、氷が融けた（という）和歌の趣である。池の鏡とも、薄氷の伝とも呼ばれている。

【注】 1 「あかしの上の姫宮を、紫の上の御子となしておはし給ひしか」(『龍野』)。「姫君を、むらさきの上の御こになし給ひておはしませは」(『小鏡』)。光源氏は明石の君の姫君を、紫の上の養女とした。 2 「なつかしく覚しめし」(『龍野』)。「恋しくおもふに」(『小鏡』)。明石の君は実の娘である明石の姫君に、五年も会えていない。 3 「正月朔日に文して、まいらせられ候へは」(『龍野』)。「正月一日、かの御かたへ文参らせ給ふ時の歌に」(『小鏡』)。六条院の冬の町に住む明石の君は元日に、春の町に住む明石の姫君に注6の和歌を送った。 4 「歌の返しに、」鶯のすたちしあとのねをわすれめや」との歌の心、誠におとなしくおもわれまいらせ候」(『龍野』)。明石の姫君から明石の君への返歌は物語では、「引き別れ年は経れども鶯の巢立ちし松の根を忘れめや」(離れ離れになってから年は経りましたが、鶯が巢立ちをした松のもとを忘れないように、私も生みの母親を忘れることはありません)とあり、本文が「あとの音」ではなく「松の根」で異なる。時に明石の姫君は数え八歳で、物語では「幼き御心にまかせて、くだくだしくぞあめる(幼いお心のままに、くどい詠み口である)」(一四六頁)と評されているが、本書と『龍野』では「誠におとなしく思はれ」とあり、歌の評価が異なる。 5 「此歌、本歌に、まつのうへになくうくひすのこゑをこそはつねの日とはいふへかりけれ」(『小鏡』)。「はつね」に鶯の「初音」と「初子」(年始の子の日。小松を根ね)と引いて長寿を祝う)を掛ける。明石の君が詠んだ注6の歌は、この歌(拾遺和歌集・春・二二・宮内卿)の本歌取りである。 6 卷名歌。明石の君が娘の姫君に送った歌で、『龍野』(ただし第三句は「ふる人は」と『小鏡』にも掲載。「松」に「待つ」、「経る」に「古」、「初音」に「初子」を掛ける。「引かれて」は「松」の縁語。 7 又、此巻に、はかためのいはひの餅、か、みの事、有」(『小鏡』)。菌固めとは正月の三が日に、鏡餅・大根・瓜・猪の肉・鹿の肉・押鮎などを食べて長命を願った行事。 8 「此かた、梅を身木にして、松を留にいたし」(『龍野』)。「留め」とは

花留め(活け花で、花の配置を整えるために用いる留め木)を意味し、中心に据える梅を松で支える。 9 「時節の

花をうらに生る」(『龍野』)。 10 「巻歌の心をかんかへ生へし」(『龍野』)。梅は鶯、松は便りを待つ明石の君、裏側

に活ける季節の花は遠ざけられた姫君になぞらえる。 11 黄鳥は鶯の異名。福寿草は初春、山吹は晩春に黄色の花が

咲き、鶯にたとえる。注13では鶯を「金」に例えている。 12 注6を参照。 13 朝鮮で刊行された、聯句の百聯を集

めた稀観書『百聯抄』(成立時期は不明)の中に見られる句、「花前蝶舞紛紛雪 柳上鶯飛片片金(花の前を蝶が舞う

様子は、入り混じって乱れる雪のようであり、柳の上を鶯が飛ぶ様子は、軽くひるがえる金のようである)」による。

謡曲「杜若」^{みづつばた}「熊野」^{くまの}にも、この句が見られる。 14 「留め」は注8参照。水草を用いて柳の配置を整える。 15

「氷とけぬる歌」とは、当巻で光源氏が紫の上に詠んだ和歌、「薄水とけぬる池の鏡にはよに類なき影ぞ並べる」(『小

鏡』)であり、「池の鏡」「薄水」はその歌に詠まれている。

(武蔵隼斗)

廿四 胡蝶 ^{コテフ}

昔、胡蝶といふは院の宮の¹后なとも四季の大法会有。²仁王経、³大般若経とも云り。其ころ花をかざりし⁴八人の

乙女、舞ことあり。秋この⁴も中宮は六条院にて行せらる。紫の上も⁵仏に花たてまつり給ふとて、⁶花瓶にさくらをさ

して、てふにはこがねのかめに山ふき、おなしき花の一ふき、いかめしう世になきにほひをつくせり。

⁷花園のこてふをさへやした草に秋まつむしはうとくみるらん

胡蝶 ^{コテフ}

御伝曰、⁸此花形、一種一色の花をは、⁹後の花形のこたく活、鶯尾か大葉をあしらひ、前に時節の花をいろく前ぶ

ちに出して、あしらひの如くに生也。¹⁰ 前の花は八色生るを習とす。頃は二月より三月の頃也と心得へし。

愚按ニ曰、四季の御読経あり。仏花と心得べし。しろかねの花瓶にさくら□をさして、蝶にはこがねの瓶に山吹の花也。是巻中の眼目と知るへし。又、舟あそびあり。二艘也。是は春の事也。¹⁴

二十四 胡蝶（法会） ひたちのきみ。桜、棠棟、正面。桜、鳶尾、大葉、八種ノ花。

【訳】昔、胡蝶というのは、院の中宮や后なども四季の大法会がある。仁王経、大般若経とも言った。その頃、花を飾った八人の乙女が舞うことがある。秋好中宮は六条院の邸で（法会を）執り行われる。紫の上も仏に花をお供えになられて、（鳥に扮した少女には銀の）花瓶に桜を挿して、蝶（の姿をした少女）には黄金の花瓶に山吹で、（ほかの山吹と）同じ（とは思えないほど見事な）花を一房、巖かで世に比類がない美しさを極めている。

（春の）花園の胡蝶までも、草陰で秋を待つ松虫は嫌だと見ているのでしょうか。

師伝によると、この花の形は、一種一色の花を後方の花の姿のように活け、鳶尾か大葉をあしらい、前方に季節の花をいろいろと花瓶の前の縁に出して、あしらいのように活けるのである。前方の花は八色活けるのを決まりとする。頃は二月から三月にかけての頃と心得るのがよい。

愚案によると、四季の御読経がある。仏花と心得るのがよい。白銀の花瓶に桜□を挿して、蝶（の姿をした少女）には黄金の花瓶に山吹の花である。この巻の主眼と知りなさい。また、舟楽の催しがある。（舟は）二艘である。これは春の頃である。

【注】 1 「こてふと云事は、昔は院の宮、一の人、きささきなども、四季の御読経とて、いかめしき大法会有」（『小鏡』）。「胡蝶の舞は、いにしへの院、宮、后などの、五月の御読誦とて」（『龍野』）。「四季の大法会」とは季の御読経

のことで、春と秋に宮中で四日間、大般若経を僧侶に読誦させる法会。当卷では三月二十日ごろ、紫の上が住む春の御殿で舟樂をした翌日、秋好中宮の秋の御殿で季の御読経が行われた。2 「仁王経、大般若経とも云り」(『小鏡』)。「大般若経をよみ給ふ法事の頃」(『龍野』)。「小鏡」には「仁王経」とあるが、それを講ずるのは仁王会という法会で、季の御読経ではない。3 「花をかさりし八人の乙女、舞事あり」(『龍野』)。季の御読経に紫の上は八人の少女を用意して、四人ずつ蝶と鳥の舞装束を着せて花を奉らせた。4 「秋このむ中宮は、六条のゐんにて、をこなはせ給ふ」(『小鏡』)。「秋このむ中宮は、六条の院にて行はせらる」(『龍野』)。5 「むらさきの上も仏に花たてまつり給ふとて」(『小鏡』)。紫の上は仏の供養に、春の御殿で美しく咲く桜と山吹の花を供えた。6 「しろかねの花かめにさくらをさして、てふには(蝶)こかねのかめに山ふき、おなしき花の一ふさ、いかめしう、よになきにほひをつくせり」(『小鏡』)。紫の上は鳥の舞装束を着せた少女には銀の花瓶に桜を挿し、蝶の舞装束を着せた少女には黄金の花瓶に山吹の花を挿して供えさせた。7 卷名歌。『龍野』は第二句が「こてふをさやく」(蝶)。紫の上が花を供えた際、秋好中宮に贈った歌。「下草」は木陰の草。「秋まつむし」は「秋待つ」に「松虫」を重ね、秋好中宮にたとえる。21少女の巻において秋の盛りに、春の御殿に住み秋の景観を楽しめない紫の上に向けて、「心から春待つ園は我が宿の紅葉を風のつてにだに見よ」と秋好中宮が送った和歌に対応する。秋に「春待つ」と詠まれたことを受けて、春に「秋まつ」と返す。8 「一種一色の花をは、得の(蝶)花形のことく生け、しやかか大葉を応答」(『龍野』)。「一種一色の花」とは花の色が一色のもので、種類だけという意味。「鳶尾(しや)」は漢名を胡蝶花というので、当卷に選ばれたか。花はアヤメに似るが小形、白色で紫斑があり、中心が黄色い。「大葉」は大きな葉、またはシソ科シソ属の葉を指す。9 「前に時節の花、色々、前へふちへ出し、真の応答のことくに生る也」(『龍野』)。「時節の花」は、ここでは春の

花を指す。「あしらい」は活け花においては、役枝を補い助ける枝を指す。10「前の花は元來、八色生るなれとも、仕立かたし」(『龍野』)。八色の花は、蝶と鳥の舞装束を着た八人の少女に例える。11「正五九月ト大般若經御読誦アリト云々」(『龍野』)。注1参照。12「四季に御読經とて」(『小鏡』)。注1参照。13「仏花」は仏前に供える花で、供花ともいう。紫の上が季の御読經で供えた桜と山吹の花を「仏花」と見なした。14注6参照。15「舟あそひ、二の舟をうかへて」(『小鏡』)。「舟遊び」とは舟の上で音楽を演奏すること。物語では、春の御殿と秋の御殿をつなぐ南の池に二隻の舟(龍頭、鷓首)を浮かべたとある。一隻には船首に龍の頭、別には鷓(想像上の水鳥)の首を付け、水難を防ぐ願いを込める。16「是は春成へし」(『小鏡』)。

(出口京香)

廿五 蛭ホタル

蛭ホタルの巻マキは玉タマかつらの君キミの御ミかたち、すぐれさせおはせしを、源ケン氏シかをる大將ダイシャウに見ミせ給タマふとて、蛭ホタルをおほく集アツめて、几キ帳チャウのかげよりほのかにみせ給タマふに、いと御ミすかたのめてたかりければ、「こゑもせて身ミをのみこかす蛭ホタルこそ」と口クチすさひ給タマひし玉タマかつらの歌ウタ也。此コノ巻マキをほたるといふこと、蛭ホタル兵部ヒヤウフキヤウ卿キョウ。

4 なくこゑも聞えぬむしのおもひたに人のけつにはきゆる物かは

蛭ホタル

御ミコト伝デンニ曰イハク、此コノ形カタ、糸イト芒スベキを別ヘツに生イケて、うしろに花ハナの小シヤウなる色イロ、赤アカ黄キの花ハナを多オホく生イケる也。芒スベキにて、みえかくれに生イケる。7 姫ヒメ百ヒャク合カヒ、唐カラ子コ百ヒャク合カヒ、きんほうけ、常ナ夏アツシ類ルイよし。5 月ツキ四ヨ日ニチ五イ日ニチに挿サすへし。時トキ節セツの絶セツ景ケイ也ト心ココロ得トクへし。8 愚オホシ按ア曰イハク、赤アカ黄キの小ホタル花ハナを蛭ホタルととりなし給タマへる御ミ伝デンの趣オモムキ、よく聞キえ侍ハハル。玉タマかつらの君キミを、兵部ヒヤウフキヤウ卿キョウのみや、此コノ君キミを限カキリな

く御心(ワンシココロ)にかけ給ひ、螢(ホタル)の集(アツメ)たる光(ヒカリ)にほのかに見奉(ミ)りたるけしき也。又、清(キヨ)らかなる珍花(チンカハ)を、姫君(ヒメキミ)の御(ミ)かたちすぐれておはしますに准(ナラフ)へ、高く生(イク)て、留(トメ)に小花(シヤウワ)の赤(アカ)きをいくるもよし。又(また)かつらの親王(シヤウワ)は清和天皇(セイワテウワウ)の第五(クイゴ)の御子(ワンコ)、琵琶(ヒハ)の上手(シヤウズ)ぞかし。是(コレ)を桐(キリ)つぼのみかど第五(クイゴ)とかけり。依而(ヨリテ)、琵琶(ヒハ)を活(イク)るもよし。又、びわは四(ヨ)のをとて、四(ヨ)の緒糸(イト)なれば、螢(ホタル)に小花(シヤウワ)を生(イク)ふと葦(アシ)か山菅(ヤマサケ)か四房(ヨフサ)を以(イテ)活(イク)べし。習(ナゼ)あり。又、¹⁶「几帳(キヤウ)のすきかげ」といふことあり。前(マヘ)に花(ハナ)なき草(クサ)をいけ、おくに小花(シヤウワ)を活(イク)るもよし。又、¹⁷「あやめの雲(クモ)」といふ詞(ワカ)によりて活(イク)るもよし。

二十五 螢 侍従。糸芒、姫百合、唐子百合。きんほうげ、枇杷、なでしこ。

【訳】螢の巻は、玉鬘の君のご容貌がすぐれていらしやうたのを、光源氏が薰大将にお見せにならうとして、螢を多く集めて、几帳の物陰からほのかに(玉鬘を)お見せになる時に、(玉鬘の)お姿がとても美しかったので、「鳴く声も立てずに、ひたすら身を焦がしている螢こそ」とお詠みになったのは、玉鬘の和歌である。この巻を螢というのは、螢兵部卿(の次の和歌による)。

鳴く声も聞こえない螢の光でも、人が消そうとしても消えないように、私の胸に燃える恋の火は、どうして消すことができるでしょうか。

師伝によると、この形は糸薄を別に活けて、後ろに小さい赤か黄色の花を多く活けるのである。薄で(赤か黄色の花が)見え隠れに(なるように)活ける。姫百合、唐子百合、金鳳花、撫子の類がよい。五月四日か五日に挿すのがよい。時節の絶景であると心得なさい。

愚案によると、赤や黄色の小さい花を螢と見なされた師伝の趣旨は、巧みに思われます。玉鬘の君を兵部卿の宮が、この君を限りなくお心にかけられ、(光源氏が)集めた螢の光でほのかに(玉鬘を)拝見した有様である。ま

た、美しく珍しい花を、姫君のご容貌がすぐれておられるのに例えて、高く活けて、花留めに赤い小花を活けるのもよい。また、桂の親王は清和天皇の五男で、琵琶の名手である。これ（桂の親王）を桐壺帝の五男（螢兵部卿）に例えた。それにより枇杷を活けるのもよい。また、琵琶は「四つよの緒お」といつて四本の絃があるので、螢に（なぞらえて）小さい花を活け、太蘭ふたにか山菅やますけかを四房にして活けるのがよい。（そのような）決まりがある。また、「几帳の透き影」ということがある。前に花がない草を活け、奥に小さい花を活けるのもよい。また、「あやめの雫」という言葉によつて活けるのもよい。

【注】 1 「ほたるの巻は、玉かつらの君の御かたち、すぐれさせおはせしを、源氏、かほる大将に見せ給ふとて、螢をあつめ、きてふのかけより、ほのかに見せ給ふに」（『龍野』）。『源氏物語』では薫大将はまだ生まれていないが、『龍野』と本書では登場している。物語では光源氏は、養女にした玉鬘に螢兵部卿が恋慕していることを知り、その思いをかき立てるため、事前に集めた螢の光で、その美しい容貌を螢兵部卿に見せた。 2 「いと御すかたのめてたかりければ、「声もせて身をのみこがすほたるこそ」と、すさみたまひしより、此巻の名と成まいらせ候」（『龍野』）。「声もせて身をのみ焦がす螢こそ言ふよりまさる思ひなるらめ」（声も立てずに身を焦がすばかりの螢の方が、あなたのように言葉に出して言うよりも、はるかに深い思いなのでしょう）は巻名歌で、注4の和歌に対する返歌。初句は物語と『小鏡』では「声はせで」。「思ひ」の「ひ」に「火」（螢の光）を掛ける。 3 「此巻、ほたるといふこと、ほたる兵部卿」（『小鏡』）。兵部卿は兵部省の長官。巻名と「螢兵部卿」という通称は、源氏が螢を放したことによる。 4 『小鏡』にも掲載。「鳴く声も聞こえぬ虫」とは螢のことで、「思ひ」の「ひ」に「火」を掛ける。 5 「此かた、糸すすきを前に生て、うしろに、花のこまかなる、赤か黄の一色を、多く生るなり」（『龍野』）。「糸芒」はイ

ネ科のスキの変種。 6 「す、きにて見えかくれに生る」(『龍野』)。糸世は几帳、赤か黄色の花は螢火になぞらえる。 7 「姫ゆり、唐子ゆり、きんほうけ、なてしこの類、よし」(『龍野』)。姫百合は初夏に濃赤、黄色の六弁花を開く。唐子百合は小さい百合を指す。金鳳花は晩春から初夏に、五弁の黄花が咲く。撫子は秋の七草の一つで五枚の花弁があり、先端が細裂した紅・白色の花が開く。いずれも「赤か黄の花」(注5)の具体例。 8 「五月四日の夜、しのひておはしたるに、けんしすきくしく、かの姫君の御かたちのすくれておはしますを宮に見せたてまつりて」(『小鏡』)。螢兵部卿が玉鬘を訪れた日を『小鏡』は五月四日と指定するが、『源氏物語』では五月五日以前の五月雨の頃とある。 9 注5・7参照。 10 「源氏のおと、^(弟)兵部卿のみや、此君を限なく御心にかけ給ひて」(『小鏡』)。 11 「其夕つかた、ほたるをおほく取あつめて、きちやうのかたひらにつゝみて、光をさと見せて、ほのかに見せしなり」(『小鏡』)。 12 小さく赤い花は、螢火になぞらえる。 13 「かのかつらのしんわうに、こゝろをかけし女こそ、月のひかりをまぢかねて、ほたるを袖につゝみけるなど、いふ、ふかきためしによそへたり。かのかつらの親王と聞こえしひとは、清和天皇の第五の御子、ひわの上手そかし」(『小鏡』)。螢の光で女性の姿を見る例は、『伊勢物語』三十九段、『宇津保物語』^(なしののみ)尚侍の巻にも見られる。前者は車内に螢を放ち、後者は帝が薄絹の直衣の袖に螢を包む。 14 「これを、きりつほのみかるとに第五とかけり」(『小鏡』)。螢兵部卿は光源氏の異母弟。枇杷を同音の琵琶になぞらえる。枇杷は十一月頃に黄色がかった白い五弁花を開き、翌年初夏に黄色の果実を結ぶ。 15 「四の緒」は絃が四本ある琵琶の別名。太藪は茎が長く、^(はなむし)花筵を編む。山菅は山野に自生する菅で、葉で笠や蓑を作る。「房」は糸や毛などを束ね、その先を垂らしたものの。 16 「几帳のすきかげの螢」(『小鏡』寄合語)。注1の本文に「几帳のかけより、ほのかに見せ給ふ」とある。手前の「花なき草」は几帳、奥の「小花」は玉鬘を表わす。 17 「あやめのしつく」

〔小鏡〕寄合語。物語では螢兵部卿は螢火を見たあと「軒の雫」に濡れながら帰り、五月五日に玉鬘へ菖蒲あやめに添えて歌を送った。「雫」は涙の比喩。例、「ながめつつわが思ふことは日暮しに軒の雫の絶ゆる世もなし」(新古今和歌集・雑下・中務卿具平親王)。菖蒲は初夏、白や紫色の花を開く。古くから邪気を払う草と信じられ、端午の節句に葉を屋根に掛け、また根の長さを競い合う根合ねあわせという催しが行われた。

(胡鴻洋)

廿六 常夏トコナツ

玉タマかづらの君キミのすませ給御タマフかたをは、西ニシの台ダイといへり。此御フオンかたの庭ニハには、なでしこの色イロトノビを調ツたる。からのも、又、やまとなでしこなども、と、のへ植ウキわたされたり。その花ハナ、おもしろく咲サキみたれて、えならず艶エンなるを、源氏ゲンジのをと、むかし、夕兒ユフカホの事コトをおほし出して、歌ウタなどよみ給タマひしゆへ、とこなつの巻マキとなづけられし事也。

6 なでしこのとこなつかしき色を見はもとの垣根カキネを人ヒトやたつねん

双夏トコナツ

御伝コトデンニ曰イハク、此形コノカタ、幹ミキを撫ナデ子シとし、多オホく生イクル。山ヤマがやの類レイ、芒ス、キもよし。別ワカの花ハナ、時節シセツに随シタカひて留トメとす。冬尾花フユハナ、或アルイハ、かや、枯カラたるを交マシてもくるしからず。頃トキは五月イヒより六月ムネを旨メとす。

愚按ウケニ曰イハク、又、やまと撫ナデ子シ、唐撫子カラナデシ、二品フタシナ活イクるもよし。咲サキみたれたる花形ハナカタ、尤モトモトよし。卷マキによれり。又、水草スエダクワ、杜若カキツハタ、

河骨カワホネ、葦アシなどもよし。かも河カハ、かつら川カハより、鮎アユ、いしぶしたてまつるとあり。又、竹タケをいけて、魚尾キヨビをはさみ

入イリ、下シタに撫ナデ子シ活イクるも此趣也コノオモムキ。

二十六 常夏 けん内侍。撫子、山萱、芒、尾花、杜若、河骨、葦、竹。

【訳】玉鬘の君がお住まいになる御住居を、西の対と言う。このお住まいの庭には、撫子の花の色を取り合わせている。唐撫子も、また、大和撫子なども取り合わせ、広く植えられている。その花はすばらしく咲き乱れて、何とも言えないほど優美で風情があるので、光源氏は、昔の夕顔(玉鬘の母)の事を思い出されて、和歌などを詠まれたので、常夏の巻と名づけられたのである。

撫子の花の美しい色を見れば、もとの垣根はどこにあるのだろうかと人が尋ねるように、いつまでも心ひかれるあなた(玉鬘)の美しいお姿を父君がご覧になれば、亡き母君のことをお尋ねになるでしょう。

師伝によると、この形は中心を撫子とし、多く活ける。山萱やまかの類や薄もよい。別の花を、季節に従って花留めとする。冬尾花、あるいは萱の枯れているのを交えても差し障りはない。頃は五月から六月を旨とする。

愚案によると、また、大和撫子と唐撫子の二種類を活けるのもよい。咲き乱れている花の姿が、最もよい。巻(の内容)によっている。また、水草や杜若かろはばた、河骨こうほね、葦あしなどもよい。鴨川や桂川から、鮎いしづしや石伏いしふしを差し上げると(物語に)ある。また、竹を活けて魚尾をはさみ入れ、下に撫子を活けるのもこの趣である。

【注】1「源氏君、玉かつらの住給ふ西のたいへならせ給ふに」(『龍野』)。「玉かつらの君のすませ給御かたをは、西のたいと云り」(『小鏡』)。西の対とは、寝殿造において主殿の西に位置する対の屋。玉鬘は、六条院(21乙女の巻に竣工した光源氏の邸宅)の夏の御殿の西の対に住む。2「此御かたの庭には、なてしこの色を調たる」(『小鏡』)。撫子は夏から秋にかけて長期間花を咲かせるため、常夏とこみなつとも呼ばれる。『源氏物語』には、「御前に、乱れがはしき前栽なども植ゑさせたまはず、撫子の色をととのへたる」(二二八頁)とある。3「からのも、又やまとなてしこなとも、とのへ植わたされたり」(『小鏡』)。「からのも」は唐撫子を指し、中国原産。五く六月ごろ、五弁花を開く。

『枕草子』に「草の花は、なでしこ。唐のはさらなり。やまどのも、いとめでたし」とある。4 「折しも、とこなつの花、咲みたれたるを御覧して」(『龍野』)。「咲みたれて、えならずおもしろし」(『小鏡』)。5 「むかし、夕兒の事をおもひいたして、歌などよみ給ひしゆへ、とこなつの巻と名つけられし事にて候」(『龍野』)。夕顔は玉鬘の母親で、光源氏のそばで女性の靈に取りつかれ息絶える(4夕顔の巻)。亡き夕顔を思い出して光源氏が詠んだ注6の和歌により、当巻を常夏と言う。6 卷名歌。『龍野』にも掲載。光源氏が玉鬘に詠んだ歌。「撫子」には、撫でるようにして大切にあつかう子ども、という意味もあり、この歌では玉鬘を指す。「とこなつかし」に「とこ」(永久に、という意味)と「常夏」(撫子の異名)を重ねる。「もとの垣根」は夕顔、「人」は内大臣(玉鬘の実父)を示す。7 「身木、なでしこ、多く生け」(『龍野』)。8 「山かやか冬す、き、切りとめてにも生る」(『龍野』)。山萱は山に自生する萱で、屋根を葺くのに用いる。薄も撫子も秋の七草。9 「時節花、前に留るなり」(『龍野』)。「留」は花の姿が乱れないようにするため、留める技法。ここでは中心の花が崩れないように、季節の花で支える。10 「冬す、き、かや、かれをませてよし」(『龍野』)。「冬尾花」は、冬になっても残っている尾花。尾花は薄の花穂。枯れた尾花や萱は、玉鬘の亡き母である夕顔を暗示するか。11 五月から六月と限定するのは、当巻が六月だから。12 注3の『小鏡』参照。物語にも、「唐の、大和の、籬ませいとなつかしく結ゆひなして」(二二八頁)とある。13 注4参照。物語にも撫子が「咲き乱れたる夕映えいみじく見ゆ」(二二八頁)とある。14 注2 12 13に引く物語本文による。15 「水草」は、水中または水辺に生える草。「杜若」「河骨」「葦」も、水辺に生える。「杜若」は夏に紫または白の花、「河骨」は夏に黄色の花、「葦」は秋に多数の小花からなる穂をつける。いずれも御殿の池や遣り水(庭に作られた川)を暗示するか。あるいは注16の川との関連か。16 「鮎、いしふしを、かも川、かつら河よりたてまつりたる

を」〔小鏡〕。鮎は古来より、食用として珍重されている。「いしぶし」は、ハゼ科の淡水魚「よしのぼり」の琵琶湖沿岸地方での呼称。小魚で、常に小石の多い水底にいることからこの名がある。『源氏物語』には、「親しき殿上人あまたさぶらひて、西川より奉れる鮎、近き川のいしぶしやうのもの、御前にて調じてまゐらす」（二二三頁）とある。「西川」は桂川の異称、「近き川」は鴨川のこと。17「魚尾」は魚尾葉。竹の葉が魚の尾のように二枚あるもの。未生流系の伝書に多くみられる表現法で、このほか、葉が三枚のものを金魚尾、二枚の葉の間に芽吹き葉のあるものを飛雁（21少女の巻、注17参照）という。ここでの魚尾は、撫子に例えられた玉鬘の両親を示すか。

（武蔵隼斗）

廿七 篝火

源氏、玉かつらを御子と賞し給へとも、誠の御子ならねは、「むかしの御かたみにも、みたてまつらはや」などおほし入て、夏のよの月なきころ、すこしくもれるけしきに篝火をともして、御琴など調させ給ふ。その琴を枕に、そひ臥給ひし事ありしゆへ、篝火の巻とはいふなり。その折の御歌に、
篝火にいろそふ恋の煙こそ世には絶せぬほのほ成らん

篝火

此御伝、赤菊二本、花入なかば過迄たわやかにさけて活る也。尤、花うつむきても、くるしからず、衛士の篝火の心なり。大葉二三枚あしらふへし。鳶尾もよし。頃は夏のよのこと也。

愚按ニ曰、夏のよの月なき頃、篝火をともして、御琴などを調させ給ふと云詞によりて、松を生、みきとし、留に赤色花を活るもよし。松を琴とし、赤花を篝に准ふ。「萩の初風」といふ詞あり。萩萩も活て縁あり。「手枕」とい

ふ詞コトあり。夏菊なつぎくよせあり。

二十七 篝火 左大将。菊、大葉、鳶尾、松。

【訳】光源氏は玉鬘を御子として、もてはやしていらつしやるが、実の御子ではないので、「昔の（契りを交わした夕顔の）御形見として拝見したいものだ」などと一途いちずにお思いになって、夏の夜の月のない頃、少し雲が出て暗いとき篝火を灯して、御琴などを（玉鬘に）演奏させなされる。その琴を枕にして、（玉鬘に）添い寝なされた事があつたため、篝火の巻とは言うのである。その時の（光源氏の）御歌に、

篝火に加わる煙のように、恋の煙こそ、決して世に途絶えることのない炎なのだろう。

この師伝によると、赤菊二本を、花器の半ば過ぎまでしなやかに下げて、活けるのである。もつとも、花がうつむいていても見苦しくなく、衛士（宮中を護衛する武士）の（焚く）篝火の趣である。大葉を二、三枚添えるのがよい。鳶尾でもよい。頃は夏の夜のことである。

愚案によると、夏の夜の月のない頃、篝火を焚いて、（光源氏が玉鬘に）御琴などを演奏させなされるといふ一節によつて、松を活けて中心とし、留めに赤色の花を活けるのもよい。松を琴と見立て、赤花を篝火になぞらえる。「萩の初風」といふ言葉がある。萩も萩も活けるのに、ゆかりがある。「手枕」といふ言葉がある。夏菊にいわれがある。

【注】 1 「けんし、玉かつらを御子にして、もてなし給ふといへとも、誠の御子ならねは」〔『小鏡』〕。「源氏、玉かつらを御子と賞し給へとも、誠の御子ならねは」〔『龍野』〕。玉鬘は光源氏の実の娘ではなく、頭中将と夕顔との間に生まれた娘である。夕顔は頭中将と別れた後、光源氏と恋仲になったが、急死した。光源氏は夕顔のことが忘れられ

ず、形見として玉鬘を引き取った。 2 「むかしの御かたみにも見たてまつらはや」などおほしめし入て」(『小鏡』)。「夕顔の御かはりにもやと、心よせさせ」(『龍野』)。光源氏は夕顔の面影を忘れ形見である玉鬘に見出だし、恋慕するようになる。 3 「夏のよの月なきころ、すこしくもれるけしきに、篝火をともしして、御琴などを調させ給ふ」(『小鏡』)。「月なき夜、か、り火をともしさせ、御琴などしらへ給ひ」(『龍野』)。光源氏は心寂しい気持ちになる、足しげく玉鬘を訪れて琴を教えた。場面は七月五、六日頃の夕月夜で、月は夕方早くに出て、夜中には沈んでしまったため、ほの暗い夜となる。月のない夜に、庭に明かりがないのは気味が悪いと言つて、光源氏は家来に篝火を焚くように命じた。なお、旧暦七月は暦の上では初秋であるが、まだ残暑が厳しいので、または立秋の前なので、物語にも「夏の月なきほど」とある。 4 「御ことを枕にして、もろともにそひふし給へり」(『小鏡』)。「琴を枕にそひふしたまひし事、有りしゆへ、か、り火の巻と申事にて候」(『龍野』)。添い寝はするが、まだ男女の仲にはなっていない。 5 卷名歌。第二句の「色添ふ」は、『小鏡』『龍野』では「立ち添ふ」(一緒に立つ、の意)、結句の「なるらん」は『小鏡』では「なりけれ」。光源氏が、言い寄つても応えてくれない玉鬘に向けて詠んだ歌。「恋」の「ひ」に「火」を掛け、自分の恋心を篝火から昇る煙になぞらえる。「篝火にあらぬ我が身のなぞもかく涙の川に浮きて燃ゆらむ」(古今集・恋一・五二九・よみ人知らず)のように、篝火は恋に苦しむ身に例える。 6 「此かた、赤菊、二本、花入半過迄、たわやかにさげて生る」(『龍野』)。二本の赤菊は、光源氏と玉鬘になぞらえるか。二本とも下げて活けるのは、養女への懸想も、養父から言い寄られるのも心苦しいことで、そのやるせない思いの表われである。菊の赤色は、篝火によそえた恋の炎を暗示する。 7 「尤、花うつむきても不苦。ゑちのか、り火の心なり」(『龍野』)。篝火を焚くとき、鉄製の籠をしなる棒で吊りさげる様子を、「うつむきて」で表現する。また、「篝火の影となる身のわ

びしきは流れて下に燃ゆるなりけり」(古今集・恋一・五三〇・よみ人知らず)のように、篝火の炎は苦しい恋の炎に見えず。光源氏も注5の歌を詠んだのち、自分の思いは「苦しき下燃えなりけり」(二五七頁)と発言している。

8 「大葉」は大きな葉、またはシソ科シソ属の葉を指す。篝火は「けしきことに広がり臥したる檀まゆかの木の下」(二五七頁)に置かれたと物語にあるので、地面に這うように広がる檀を大葉で表わしたか。9 鳶尾の花はアヤメに似るが小形、白色で紫斑があり、中心が黄色い。その花の色で篝火の炎を示すか。あるいは葉は幅広で三〜四センチになるので、「大葉」の代用か。10 注3参照。11 注3参照。12 「みき」は活け花において中心となる木。「留」は挿花の根元に付けて、緩まないように固めとする草花。「赤色花」は赤色の花ならば種類を問わず、篝火の火を表わす。

13 和歌の世界では、松風の音は琴の音に喩えられるので、活け花でも琴を松で表現する。例、「夏の夜、深養父が琴ひくをききて 短夜みじかよの更けゆくまに高砂の峰の松風吹くかとぞ聞く」(後撰和歌集・夏・一六七・兼輔)。「赤花」はアカバナ科の多年草で、山野のやや湿った所に生え、夏に紫紅色の小さな四弁花をつける。ただしここでの「赤花」は、赤色の花の総称かもしれないが、いずれの場合も篝火に見立てる。14 「おきの初風」(『小鏡』寄合語)。萩は水辺に生え、薄に似て、それより大きい。この場面は初秋で(注3参照)、「初風涼しく吹き出でて」「萩の音もやうやうあはれなる」(二五六頁)と物語にある。萩は和歌では風と共に詠まれ、秋の訪れを気づかせる草である。例、「萩の葉のそよとつげずは秋風を今日から吹くと誰か言はまし」(躬恒集・七〇)。

15 「萩」は秋の七草の一つ。秋、枝先に蝶型の花を多数咲かせる。「秋の色を知らせそむとや三日月の光をみかく萩の下露」(拾遺愚草・二二六・藤原定家)のように、秋を示す代表的な植物として詠われる。また、「秋はなほ夕まぐれこそただならね萩の上風萩の下露したのろ」(和漢朗詠集・上・秋・秋興・二二九・義孝少将)と詠まれてからは、「萩の上風、萩の下露」は秋の趣を示

す成句として定着する。「萩萩も活けて縁あり」とは、萩も萩も初秋の場面にふさわしいからである。16『源氏物語』には「手枕」という語はないが、『小鏡』は寄合語として「琴を枕」と共に挙げている。「手枕」は和歌では、相手の腕を枕にして共寝する情景で歌われる。17「夏菊」は六〜七月に花が咲く、早咲き型の菊の品種の総称で、この初秋の場面に合う。

(出口京香)

廿八 野分

夕霧の大将あかしの上の姫宮の方にて、すゝり、紙をこひて、雲井のかりへ御文つかはす。かるかやにつくかみのいろ、むらさきの薄やう也。折しも大風ふき、物さわかしく、所々のつゐ地、すいがき、瓦など吹ちらし、すさましく、おそろしかりし也。野分の朝、けんし、所々へ風のとふらひに参給ひしを、忘さりしとの事なり。風さはきむら雲まよふゆふへにも忘る、間なくわすられぬ君

野分

御伝曰、此形、曲松に、留、かや、時節の花をあしらふべし。大風吹過たる気色を生へし。松二本、うら枯せもよし。頃は八月なれば也。

愚按曰、雲井の雁の御いとこの姫君を深く夕霧の大将、心にかけて給ふあり。竹を生、飛雁の葉を上裏にハサミ入へし。又、御文、紫のうすやうの紙也。薄紫の花よし。又、萩を生るは、「萩の葉すくる風」といふ詞によれり。又、芒に露うちたるを活るは、野分に村雨ふりたる所也。又、琴をあかしの御方、弾し給ふ所あり。松にをみなへし、よし。又、明石の巻の意も、ふくみてよし。

二十八 野分（風吹き） 六のきみ。松、芒、竹、萩。

【訳】夕霧の大将は明石の君の娘（明石の姫君）の部屋で、硯と紙を求めて、雲居の雁へお手紙を（書いて）送られる。刈萱かむかやに付ける紙の色は、紫の薄い紙である。折しも大風が吹いて騒々しく、あちこちの土塀、透垣、瓦などを吹き散らし、激しくて怖かったのである。野分（台風）の（通り過ぎた翌）朝、光源氏は（六条院の）あちらこちら（の女君たち）へ風の見舞いに参られたが、（その間も夕霧は雲居の雁を）忘れなかったということである。（夕霧が雲居の雁に送った歌は）

風が吹き荒れ、一群の雲が迷う夕べでも、忘れる間もなく忘れられないあなたです。

師伝によると、この形は曲り松に、根締めとして萱や季節の花を取り合わせるのがよい。大風が吹き過ぎた様子を活けなさい。松は二本、先が枯れた薄もよい。頃は八月だからである。

愚案によると、雲居の雁という（夕霧の）従姉妹いとこの姫君を、夕霧の大将は深く心にかけておられる。竹を活けて、飛雁の葉を上うへの裏うらに挟み入れるのがよい。また、（夕霧が雲居の雁へ送った）お手紙は、紫の薄い紙である。薄紫色の花がよい。また、萩を活けるのは、「萩の葉を吹き過ぎる風」という言葉によっている。また、薄に露を置いたのを活けるのは、野分で村雨が降っている風情である。また、琴を明石の君がお弾きになる場面がある。松に女郎花（を活けるの）がよい。また、明石の巻の意味も含んでよい。

【注】 1 「秋も半の月、夕霧の大将、あかしの上の姫宮の方にて、硯、紙などをこひたまひ、御いとこ、雲井のかりと申方へ、文しておくり給ひ」（『龍野』）。「風のまさきに御いもうとのあかしのはらの姫君の御かたへ参り給ひて、硯、かみこひて、かの雲井のかりへ御文つかわす」（『小鏡』）。夕霧は野分の巻ではまだ中将で、大将に昇進するのは

34若菜上の巻だが、『小鏡』も『龍野』も大将とする。雲居の雁と夕霧はいとこ同士で、二人とも祖母の大宮に育てられた幼馴染であり、年頃になると好き合うようになる。そのことを内大臣(雲居の雁の父)に知られ、三年前に引き裂かれて以来、一度も会っていない。 2 「かるやかにつくかみの色、むらさきのうすやうなり」(『小鏡』)。「刈萱」は屋根葺きのため刈り取る草の総称。『枕草子』も「草の花は」の段に「かるかや」を挙げている。 3 「頃は八月に大風ふきて、物さはかしく所々のつみち(築地)、すいかき(透垣)、瓦なとふきちらし、すさましく、おそろしかりし也」(『小鏡』)。築地は泥を塗り固めて作るので、雨に弱く崩れやすい。透垣は板や竹で、間を少し透かして作った垣根。 4 「野わきのあさ、けんし、所々へ風のとふらひに参らせ給ひしなり」(『小鏡』)。「雲井のかりと申方へ、文しておくり給ひし折しも、いとさうくしく、大風ふきにしも、わすれさりしとの事にて、野分の巻と申にて候」(『龍野』)。本書の本文は、『小鏡』の文章の後に『龍野』の一節を続けたため、何を忘れないのか不明瞭になり、文意が分かりにくい。 5 巻名歌。『小鏡』『龍野』も同文。「群雲」は俄に群がり集まる、動きの激しい雲。 6 「此かた、曲ひ松に切留メ、かや、時節の花、応答へし」(『龍野』)。松は台風に見舞われたため、曲げた形に活ける。「留め」は根締めで、挿した花や枝などの根元を締め、形を整える花材を指す。萱は薄や菅など、屋根を葺くのに用いる草の総称(注2参照)。「時節の花」は旧暦八月(注9参照)に咲く花。 7 「大風の吹く躰に生へし」(『龍野』)。 8 「松、二本にもいたし候。冬かれす、きもよし」(『龍野』)。二本の松は、再会を待つ夕霧と雲居の雁を暗示するか。「末枯れ」は秋の末に、草木の梢や葉先が枯れること。薄は秋に大きい黄褐色の花穂をつけ、その穂先が枯れた様子を指し、『龍野』の「冬枯れ薄」もほぼ同じ形態。 9 注3の『小鏡』参照。 10 「かの雲井雁とよみし御いとこの姫君を、ふかく心にかけて」(『小鏡』)。 11 飛雁は、二枚の竹の葉の間にある芽吹き葉を指す。 21 少女の巻、注17参

照。 12 注2 参照。 13 「おほかたに萩の葉過ぐる風の音も我が身一つにしむ心ちして」(『小鏡』)。光源氏は明石の

君を見舞ったが、すぐに立ち去ったあと、明石の君が詠んだ歌。「萩の葉」は明石の君自身、「風」は光源氏に喩え、光源氏の形だけの見舞いに対する感謝と失望の念を歌う。参考「いとどしくもの思ふ宿の萩の葉に秋と告げつる風のわびしさ」(後撰和歌集・秋上・よみ人知らず)。

14 「野分に村雨ふりたる、心得へし」(『小鏡』)。「村雨」は急に

激しく降っては止む、にわか雨。物語では台風の通り過ぎたあと、未明に村雨が降る。 15 光源氏が明石の君を見舞

った時、明石の君は琴を弾いていた。 16 琴の音に松風の音が似通うことから、和歌では松風を琴の奏楽に喩える。

例、「琴の音に峰の松風通ふらしいづれのをより調べそめけん」(拾遺和歌集・雑上・四五二・斎宮女御・松風入夜琴

といふ題をよみ侍りける)。女郎花は秋の七草の一つで、和歌では女性に例えて詠む。ここでは明石の君を女郎花、

琴を松で表現する。 17 光源氏は13明石の巻で帰京する際、都から持参した琴を形見として明石の君に残した。(胡鴻洋)

廿九 御幸

1 ころは十二月、帝、大原野に行幸ありしに、源氏の御ものいみありて、御供なく、ほいなしとて、御歌をくたされし

を、御かへしの歌などあり。此みゆきは冷泉院也。鷹狩なれば、いろ／＼の興あり。

雪ふかきをしほの山に立きしのふるきあとをもけふはたつねよ

源氏、御返事、

をしほ山みゆきつもれる松原にけふ斗なるあとやなからん

御幸

『源氏流極秘奥儀抄』注釈(四) 23初音く30藤袴

御伝コトシニイフニ曰コト、此卷コトの意イを以カシ考カフるに、若松ワカマツに時節シセツクの木クハホク花ハナをあしらふへし。留ルはふきは、笹サもよし。頃コトは十二月コト、大原野オホハラノにみゆきし給ミひし也ナリ。

雪ユキふかきををしほの山ヤマにたつきしのふるき跡アトをもけふはたつねよ

愚按コト曰コト、行幸ミユキとは鷹狩タカトリに帝ミカドのいてましあるをいふなり。さて、をしほ山ヤマといふより、小松コマツをイク活ナラヒる習ナラヒ也ナリ。「大原オホハラやを

しほの山ヤマの小松原コマツ」といふ古歌コカによれり。又マタ、雉子キシを景物ケイブツとす。班葉フナノハのものモノをイク活ナラヒる。是コトを雉子キシにたとふ。何ナニによ

らす、ふ入イリの草木サウモクあり。又マタ、「ふるきあと」といふより、古木コボクに苔コケなどのつきたるよし。松マツ・杉スギ・栢カヤ・かしわ・竹タケ、

皆みな「ふるきあと」、いふに叶カナふ也ナリ。梅ウメも又マタ、「ふるき跡アト」といふに、かなふへからん。又マタ、白花オホを多くイク活ナラヒるもよし。

雪ユキのふりたるけしきに准ナラフふ也ナリ。

二十九 御幸ミユキ(鷹狩) 弁ヒのきみ。若松ワカマツ、時節シセツクの木花キハナ。ふき、笹サ、(松マツ、杉スギ、栢カヤ、竹タケ、古木コボク)。

【訳】頃コトは十二月コトに、帝ミカドが大原野オホハラノへ行幸ミユキされたときに、光源氏ミチノリは御物忌ミモノイみがあつて、(帝ミカドの行幸ミユキに)御供ミツケすることコトがな
く、(冷泉帝レイセンテは光源氏ミチノリの不参加フセウカを)不本意フホンイであるとして、(光源氏ミチノリへ)御歌ミカをお与タえになつたのコトに対し、(光源氏ミチノリの)
御返ミタビしの歌ウタなどがある。この行幸ミユキ(をなさつた天皇テンノウ)は、冷泉帝レイセンテである。鷹狩タカトリ(の行幸ミユキ)であるので、様々さまざまな興趣キョウソ
がある。

雪ユキ深い小塩山オシおやまへと飛び立つ雉キの足跡アソビを尋ヒねるように、この大原野オホハラノの行幸ミユキという昔ムカシからのしきたりを今日は尋ヒねて

(あなたにも同行ドウギョウして)ほしかつた。

光源氏ミチノリの御返事ミタビとして、

小塩山に深雪が降り積もった松原に、今日ほどの（盛んな御幸の）先例はないでしょう。

師伝によると、この巻の主旨を考えるに、若松に季節の花木をあしらうのがよい。花留めは露の葉、笹もよい。頃は十二月、大原野に行幸なさったのである。

雪深い小塩山へと飛び立つ雉の足跡を尋ねるように、この大原野の行幸という昔からのしきたりを今日は尋ねて（あなたにも同行して）ほしかった。

愚案によると、行幸とは、鷹狩りに帝がいらつしやることをいうのである。さて、小塩山ということにより、小松を活けるならわしがある。「大原や小塩の山の小松原」という古歌によっている。また、雉子を風物とする。斑入りの葉のものを活ける。これを雉子にたとえる。（雉は）真白斑の鷹にも似る。何の草木に限らず、斑入りの草木がある。また、「古き跡」ということにより、古木に苔などが付いているのもよい。松・杉・栢・竹はすべて、長い年月を経たもので、いずれも「古き跡」というのに合うのである。梅もまた、「古き跡」というのに合っているだろう。また、白い花を多く活けるのもよい。雪の降っている様子になぞらえるのである。

【注】 1 「ころは二月に」（『龍野』）。「頃は十二月なり」（『小鏡』）。『源氏物語』には、「その十二月に、大原野の行幸とて」（二八九頁）とある。 2 「みかと、大原野に行幸ありしに」（『龍野』）。「此行幸は、大原野の行幸の事なり」（『小鏡』）。帝は今上帝（冷泉帝）。大原野は平安京の西方に位置し、そこには藤原氏の氏神を祭り朝廷の尊崇が厚い大原野神社が鎮座する。 3 「源氏の御ものいみありて御供なく」（『龍野』）。物忌みとは、陰陽道で日や方角が悪いとされるときに、一定期間、家にこもって心身を慎むこと。光源氏は、物忌みを理由に行幸に参加しなかった。 4 「ほいなしとて、御歌をくたされしを」（『龍野』）。光源氏の不参加を残念に思った冷泉帝は、光源氏に注8の和歌を

詠んで送った。 5 「源氏、「おしほ山御幸つもれる」と御返しありしを」(『龍野』)。光源氏は冷泉帝に注10の歌を返した。 6 「主上は、かの源氏の御しのひの御子、れいせいゐんにておはしましき」(『小鏡』)。冷泉帝は桐壺帝の皇子とされているが、実は光源氏の子。 7 大原野は平安時代には朝廷の狩獵が行なわれ、当巻の大原野行幸も鷹狩りが目的である。 8 『小鏡』に掲載。上の句は序詞。「ふるき跡」は、足跡と事跡の両意。 9 「源氏、御返事」(『小鏡』)。注5を参照。 10 卷名歌。『小鏡』『龍野』にも掲載。第二句の「みゆき」に「深雪」と「行幸」を掛ける。今日の行事を前例のない盛大さと讃え、自身の不参加をはぐらかしている。 11 「此形、身木、若松に、時節の木花、応答へし」(『龍野』)。若松は樹齡の若い松、または生えて間もない松。若松を用いる理由は注18を参照。 12 「留メ、やきは笹なり」(『龍野』)。「ふきは」の意味は、『源氏流極秘奥儀抄』草の巻にも「ふき」とあることから藤の葉であるが、『龍野』には「やきは笹」とある。焼葉笹は隈笹の別称で、葉は冬になると縁が白色に変わる。白色は注26の雪を表わすか。 13 注1を参照。 14 注2を参照。 15 注8の歌と同じ。 16 注7を参照。 17 小塩山は、京都市西京区大原野にある大原山の別名。 18 小松を生けるのは、「大原や小塩の山の小松原はや木高かれ千代の影見む」(後撰和歌集・哀傷・一三七三・紀貫之)による。 19 物語では鷹狩りで捕らえた雉に、注8の冷泉帝御詠が添えられた。 20 斑入りとは、地の色と違った色がまだらに交じっていることで、植物では葉や花などに見られ珍重された。「班葉」は「斑葉」の誤写、または慣用的に「班」の字を代用したとも考えられる。 21 雌の雉は全体に黄褐色で、黒褐色の斑紋が散在している。また「真白斑の鷹」は、羽毛に白いまだらな紋のある鷹。 22 斑入りであれば、草木の種類は問わない。 23 注8の歌の第四句「古き跡」により、苔むした古木を用いる。 24 松・杉・栢は常緑高木で、冬においても緑の葉を見せることから、不老長寿の象徴として尊ばれ、ここでは冷泉帝の治世を寿ぐ。そ

れに對して柏は落葉高木であるが、松柏という語は常緑樹の総稱として用いられる。竹に關しては注25を参照。冬
の寒さに耐えて松や竹は緑を保ち、梅は花を咲かせるため、松竹梅は古來「歲寒の三友」として、めでたいもの
象徴とされる。 26注8の初句「雪深き」による。 25

三十 蘭

玉かつらの内侍、いまた鬚黒のもとへ御うつりなき頃、夕霧の大將、蘭の花の見事なるを折て、「我にはふくあり」と、みすの外よりさし出し給へり。玉かつらと夕霧の大將は、まことの兄弟にてはなく候。らんと云ふも、ふちのかまのこと故、この卷の名とは、したるなりけり。此歌をよみて御手をいさゝか、ひきうこかしたり。

おなし野の露にやぬる、藤袴あはれはかけよかこと計も

蘭

御伝曰、此形、藤袴を幹にして、糸芒をも時節の花をもあしらふへし。此形は前後二株に活へし。両方共みきもあしらひも、同じやうにいくへし。尤うしる幹右にあしらひ、前のみき左にあしらふへし。場所違へる様に活へし。習とす。

愚按ニ曰、蘭をフヂハカマと云。群芳譜ニ曰、蘭はアラ、ギ也。紫苑花をフヂハカマと云也。此説コ、ニ当れり。たとへ蘭にても蘭は活かたかるへし。又、蘭の花のいとおもしろく咲たるをみすの内へさし入て、此歌をよみて御手をいさゝか引うこかしたり云云。此蘭といへるもランにはあらて、藤ばかりなるべし。又、糸芒、太蘭、トグサなどをも活てよし。是を簾とみると知るへし。

三十 蘭 あかしの入道。藤袴、糸芒、紫苑シオン、太葦。疑ヒとアリ

【訳】玉鬘の内侍が、まだ髭黒の大将のもとへ(結婚して)お引越しにならない頃、夕霧の大将が蘭の花の見事なものを手折り、「私には(あなたと同じ色の)喪服を着る(不思議なご縁があります)」と、御簾みすの外より差し入れなされた。玉鬘と夕霧の大将は、実の兄弟ではございません。蘭らんというのも藤袴ふじばかまのことなので、この巻の名としたのだ。(夕霧の大将は)この歌を詠み、(玉鬘の)御手をほんの少し引き動かした。

同じ野にあつて露に濡れている藤袴のように、(あなたと同じ大宮の孫として祖母の喪に服している私を)いとおいしいと思ってください。申し訳程度でも。

師伝によると、この形式は藤袴を中心として、糸薄も季節の花も(その取り合わせとして)あしらうのがよい。この形式は、前後に二株に(分けて)活けるのがよい。(前後二株の)両方とも、中心(の藤袴)も取り合わせ(の草花)も、同じように活けるのがよい。もつとも、後ろの中心(の藤袴)は右にあしらい、前の中心(の藤袴)は左にあしらうのがよい。(前後の藤袴はそれぞれ)場所を違うように活けるのがよい。(それを)決まりとする。

愚案によると、蘭をフジバカマという。『群芳譜』によると、「蘭はアララギである。紫苑花をフジバカマという」とある。この説がここでは当てはまる。たとえ蘭であっても、蘭は活けにくいだろう。また、(夕霧の大将が)蘭の花の、実に美しく咲いているものを御簾の内へさし入れて、この歌を詠み(玉鬘の)御手をほんの少し引き動かしたと云々。この蘭と言っているのもランではなく、藤袴であるだろう。また、糸薄、太蘭、木賊とくさなども活けてよい。これを御簾に見立てると知りなさい。

【注】1 「玉かつらの内侍、いまた、ひけくろのもとへ御移りなき頃、夕霧の大将、らんの花の見事成を折て、我に

は(服)ふくありと、みすの外より、さしいたしにある歌にてありまいらせ候(龍野)。「らんの花」については、注2を参照。2「玉かつらと夕霧の大將は、まことの兄弟にてはなく候。らんといふも、ふちはかまの事ゆへ、此卷の名といたしたる事にてまいらせ候(龍野)。「らん」は藤袴の異名。藤袴は漢名が蘭で、秋に淡紫色の花を咲かせる。山上憶良が秋の七草を読み込んだ歌、「萩の花尾花葛花撫子(くすはなみだし)が花女郎花(おみなえ)また藤袴朝顔が花(万葉集・卷八・一五三八)にも見られる。『和漢朗詠集』などでは歌題として「蘭」を立てるが、歌中では和名の「藤袴」が用いられる。『古今和歌集』では、「主知らぬ香こそ匂へれ秋の野に誰が脱ぎかけし藤袴ぞも(秋上・二四一・素性)」のように、主にその香りが賞でられた。3「蘭の花のいとおもしろきを、みすの内へさし入て、此歌をよみて、御手をいさ、か、ひきうこかしたり(『小鏡』)。『源氏物語』では「御手」ではなく、夕霧が御簾(ごし)に玉鬘(たまむす)の「御袖」をつかみ引き動かした。「此歌」は注4の和歌を指す。4卷名歌。第二句は『小鏡』も『龍野』も「露にや濡るる」だが、『源氏物語』は「露にやつるる(露に萎れる)」。宮仕えを勧める光源氏の使いとして、玉鬘のもとを訪れた夕霧が、実の兄弟ではないことが判明した玉鬘に対し、自らの胸中を訴えた歌。和歌に詠まれた「藤袴」は喪服を示す「藤衣」を暗示するとともに、「藤」の花の薄紫色からゆかりを連想させる。「紫」が「ゆかり」を意味するようになったのは、「紫(むらさ)の一本(ひとぽん)ゆゑ(ゆゑ)に武蔵野(むさしの)の草はみながらあはれとぞ見る(古今和歌集・雑上・八六七・よみ人しらす)」により、植物の紫草が血縁あるいは愛すべき縁につながっていることを表すようになったためである。5「此かた、ふちはかまを身木にして、糸す、き、時節の花を応答也(『龍野』)。藤袴・糸薄は秋の花なので、ここでの「時節の花」は秋の花を指す。6「此形は、二かぶに生る。横へふたかぶにてはなし。後へ二かふなり(『龍野』)。ここで二株に分けるのは、それぞれの株を夕霧と玉鬘になぞらえるため。7「応答は、両身木へ、同シやうに同し物をあ

いしらふべし」(『龍野』)。同じあしらいを施すのは、夕霧と玉鬘がともに大宮の孫であることを表す。8「尤、後の身木は右に応答、前の身木は左に応答へし」(『龍野』)。「いけばな総合大事典」(主婦の友社、一九八〇年)によると、「右」は「南に向いたとき、西の方角をいう」もので、「花に面した人のほうからいうと左側が花の右となる」。東は日の出、西は日没の方向であるため東側、すなわち花の左(人から見て右)が上位となる。前の藤袴を後ろの藤袴より上位になるように活ける。9「場所をちがへ応答べし」(『龍野』)。場所を違えて活けるのは、夕霧と玉鬘が実の姉弟ではないことを表すか。10『いけばな総合大事典』によると、『群芳譜』は「明末の天啓元年(一六二二)に王象晋が、唐・宋・元・明代に刊行された農書から、「享部」(穀類、野菜、果樹)、「利部」(茶、桑、麻、葛、棉、葉草、樹木)、「貞部」(草花、花木、鶴、魚)に三大別した各項目ごとに要点をとりあげて、各論の形にまとめ、それに「元部」(総論)として序、大綱、天文、農事暦を付した全三〇巻の名著」である。なお『大和本草』には、「真蘭 和名ふぢばかま、又あら、ぎとも云」とある。11注3を参照。12注10を参照。13「糸世」は、ススキの一変種であり、本種に比べ茎・葉・根ともに全体に細く小振りである。花材としては秋のもの。14「太蘭」は、カヤツリグサ科の多年草で、夏から秋にかけ、茎頂に楕円形で黄褐色の小穂を多数つける。花材としては夏のもの。15「トグサ」は「砥草」とも表記する。茎の先端に単生する胞子囊穂は長さ一センチほどの楕円体で、著しく硬く、ざらつので木地、骨、爪などをみがくの用に用いるため、砥の役をする草と呼ばれる。地中を横に走る根茎から、高さ五〇〜一〇〇センチの多数の地上茎が群生する。秋の花材として知られる。16糸薄、太蘭、木賊はすべて細長い植物であるため、御簾に見立てられる。

(井上大佑)